

小作騒動から小作争議へ

——石川県鹿島郡鳥屋村の斗争事例を中心として——

鎌 田 久 明

は し が き

幕藩体制下の農民の斗争の主流をなしたのは、農民一揆であり、小作騒動は幕藩体制の崩壊過程の中で、寄生地主制の形成にともなつてあらわれて来るが、それは明治維新の变革にいたるまでは、底流としてしか役割を演じない。維新の变革を経て寄生地主制が確立し、その発展のコースがはじまるとともに、これまでの小作騒動は小作争議にまで発展し、小作争議が農民斗争の主流となる。この一般的な過程が、石川・富山両県を含む旧加賀藩領において、具体的によつてあらわれたかを明かにすることが、本稿の目的である。そのために本稿では、石川県鹿島郡鳥屋村・良川の小作騒動（明治六年）と同村一帯の小作争議（明治二五—三四年）の二つの事例を中心としてとりあげた。これらの事例の分析を通じて、旧加賀藩領における右の過程の特殊性がいくらかでも明かにされれば、何よりの幸である。北陸地方、ことに旧加賀藩領の寄生地主制とそれをめぐる農民斗争に関する歴史的研究は、この地方の郷土史研究の賑やかさにも拘らず、いまだブランクのまま残されており、本稿はこの分野に関する研究のいわば最初のこころみである。先学諸氏の御批判を仰ぎたい。

一 小作騒動とその後の見透し

近世中期以降の加賀藩における小作騒動の事例は、その農民一揆の事例に比較すれば、はなはだ乏しい。万治・寛文の頃からはじまる領内農村への商品経済の普及・浸透、農民層の分化の進行、領主財政の窮迫、農民層収奪の強化という危機深化の一連の過程は、正徳・享保期にいたつて、領主権力に対するはげしい農民一揆をひき起すこととなり、宝暦期に入れば、それは全領内にわたる農民一揆にまで発展するが、村落内の親作・子作間の階級対立と抗争はこの頃になつてはじめて農民一揆の底流としてあらわれてくる。子作の親作に対する抵抗は、領主側の収奪の強化とともに、その残余部分の分け前をめぐつて、はげしいものになつてくるのである。^①明和二年（一七六五）藩当局は、領内の小作農民に対し、「高主え対し小作の者共指引合の儀に付、大勢連にて罷越候儀は不相成儀に候処、近年猥に相成、年暮指引合の儀に付大勢連にて罷越体相間候。以来は指引合等在之高主へ小作の者共罷越節、一兩人宛罷越可申候。……若不斷大勢罷越候はば、理非無構急度可申付候^②」と、子作が集団で親作に小作米の減免を交渉することを、厳禁する旨の禁令を発している。当時すでにそうした子作の親作への抵抗があつたわけであるが、これはまだ動きはじめた底流にすぎず、その後も農民の斗争の主流は依然として、領主権力の徹底的な収奪に対する農民一揆である。明和・安永・天明と一揆の波は高まり、ついで一時的沈静期を経て、文化・文政から安政にいたるまでの長期の波が訪れる。これらの一揆のうち文化一〇年（一八一三）支藩富山藩の一揆の時には、子作の親作に対する「余米切」の要求が表面にでてくるが、この場合にしても、一揆の主要攻撃目標は領主権力とこれに結びついた特権商人層であり、「余米切」の要求がでてくるのは、はじめ都市に攻撃を集中した一揆が敗退し、農村に分散していく最後の局面に入つてからのことであつた。^③藩政期の加賀藩領で、単純な小作騒動とみるべき唯一の事例は、安政五年（一八五八）一〇月三日、越中国新川郡泊附近の子作六―七〇〇人が、泊の小沢屋その他附近の「豪農」七人の家をおそつた事件である。子作たちは不作を理由に、作徳米三分の一を用捨せよと迫り、一四人のものが藩当局によつて逮捕され、三日の後鎮静している。^④しかしこの騒動もまた安政五年の加賀藩領全体をおおつた大一揆の余波をうけて触発された

ものとみられる。

藩政期の小作騒動に関する史料は以上につきるが、これをみても、加賀藩においては、小作騒動の事例はきわめてとほしく、その少数のものも、必ず農民一揆にもなつて起つており、斗争のエネルギーにしても決して強いものではないことを知ることができる。先進地帯のような村方騒動は、領内ではほとんどみることができなかつたから、それが村方騒動と結びあつてあらわれることもなければ、まして小作騒動が小作騒動としてだけたかわれたこともなかつた。藩政期の加賀藩小作騒動のこうした特殊性は何を前提としているのであらうか。

藩領は、かつて明かにしたように、積雪地帯に属しており、したがつて水田単作経営が農村では圧倒的な比重をもち、農民の経営はいちじるしく自然経済的であつた。加賀藩の強大な権力の基盤は、こうしたおくれた農村と農民経営にあり、この特質は藩政期を通じてつらぬかれたのである。もちろんおくれた経済的基盤と強大な封建的政治権力という諸条件のもとにあつても、農民の商品生産者化は進み、農民層の分化は発展するが、しかしそのものでは、この動きが阻止され、抑圧されることもまた否めないであらう。農民層分化の未成熟、地主層の生長の抑圧、加賀藩小作騒動の右のような特殊性の前提にはこうしたものがあつたのではないであらうか。

明治六年にはじまる地券交付・地租改正を契機として、旧加賀藩領においては、小作騒動が大きく前面に押しだされてくる。新政権の諸政策に対する抵抗は、ここではもつぱら親作に対する子作人の斗争としてあらわれるのである。なかでも明治一〇年の富山県礪波郡の農民騒擾は、もつともよく知られているが、本稿でとりあげた明治六年の石川県鹿島郡の小作騒擾も、またその一つであつた。しかしこれらの騒擾は、先進地帯において幕藩体制の崩壊過程にあつた小作騒動と同じ性格のものとみるわけにはいかないであらう。未成熟な農民層の分化、抑圧された地主層の生長、それをおおう停滞し固定化した共同体的諸関係、そこに上からあたえられた農奴解放としての、地租改正を中心とする諸政策。未成熟な階級関係ははげしく動揺し、新しい均衡をもとめて、親作・子作間の斗争がひき起され、

結局は新政権の意図した通りに、地主の優位において再編成が完了する。旧加賀藩領における地券交付・地租改正を契機とした小作騒擾は、こうした意味をもつと考えてよからう。したがって、この期の小作騒擾を藩政期の小作騒擾に直接連続するものとみることはできない。藩政期の小作騒動から明治中期にはじまる小作争議までの間に、この地方ではこのような特殊な小作騒擾の段階を経過しなければならなかつたのである。

明治一七年の地租改正条令制定につづく二—三〇年代の農民斗争に関する研究は、全国的にみて、これまできわめて貧困であつた。⁶⁾だが旧加賀藩領についてみても、この期の農民斗争は決して空白ではなかつた。たとえば明治二〇年代末の富山県下においては、「或一二の村落の如きは、旧慣を襲うて小作米は以前のまゝにすと雖も、尚ほ小作人と地主との間に騒擾あるを聞くこと屢々⁶⁾」であり、石川県鹿島郡においては、明治二五年から三四年にわたつて、永小作権をめぐるはげしい法廷斗争が、地主・小作人間にたたかわれている。本稿でとりあげたのは、この後の事例であるが、この場合には、地主は地租改正後の小作騒擾期を通じて、すでに半封建的地主としての地位を確保しており、これを足場にして、小作人側に残存した永小作権を清掃するために執拗な攻撃をかけているのである。これに対し小作人側は、徐々に後退しつつも、永小作権を守り通している。この時期の旧加賀藩領における農民斗争は、このような地主側の攻撃から永小作権を守るための小作人の苦難にみちた斗争によつて特色づけられているように思われる。そして小作人の斗争も、この段階までくれば、もう単なる小作騒擾ではなく、小作争議とよばれてよい。斗争の相手方はすでに半封建的地主であり、斗争の合法性が獲得されている。斗争の組織や斗争の持続性においても、それは小作騒擾の段階とはいちじるしい相異を示しているからである。

地租改正を契機とする農民騒擾の鎮圧、自由民権運動における貧農・小作農民の斗争の挫折、その後に来る明治二—三〇年代は、地主側の発展期であり、したがって地主の攻勢期である。だからこの時期の農民斗争は、全国的にみて、いちじるしく沈滞しているようにみえる。しかしそれは、はげしい地主攻勢をうけて、小作農民が抵抗を放棄し

たということではなかった。そこには、数も少く、華々しいものでもなかったが、右の事例のような執拗な、長期にわたる小作争議があつたのである。そしてこうした苦難にみちた争議が、小作人層によつてたたかいつづけられたところ、その後に来る農民運動の飛躍的な発展の前提条件をなしたのである。

- (1) 拙稿「宝暦七年越中城端騒動について」(金沢大学法文学部論集・法経篇・二) 参照。
- (2) 「加賀藩史料」第八編、三七九頁
- (3) 坂井誠一「文化十年富山藩百姓一揆について」参照。
- (4) 「下新川郡誌稿」上巻、六六八頁
- (5) たとえば稲岡進「日本農民運動史」、青木恵一郎「日本農民運動史」その他のものをみても、足尾銅毒事件などをのぞけばこの時期の農民斗争に関する研究は、はなはだ貧困である。
- (6) 横山源之助「日本之下層社会」二六一頁

二 明治六年の良川小作騒擾

以上の一般的見透しを前提として置いて、ここではまず明治六年の地券交付をめぐるひき起された、石川県鹿島郡島屋村良川の小作騒擾をとりあげてみよう。問題は、この村で何が争われ、その結果がどうなつたかということである。

A 良川村と小作慣行

良川村は現在島屋町の一字となつてゐるが、古米能登所口と金沢とを結ぶ幹線路に沿う馬次所であり、金沢から約一四里、所口から約三里という所にある。いまなお水田耕作を農業経営の中核とする北陸型の農村である。幕末天保

一〇年（一八三九）以後のものと推定される史料によれば、良川村の概況は次のようであつた。³⁾

「良川村 鹿島郡 片山里方
馬次所

草高

一千九百七拾六石

定免 四つ管分 金沢え道程拾参里貳拾七町程

一 百姓家数 百三拾六軒

一 頭振家数 八拾四軒

惣人数千五拾六人 内五百人男
五百五拾六人女

外三軒 藤内

.....

一 耕作馬 拾疋 牝馬

一 押立候稼無御座 苧紬 紬 蓆 日雇賃取

総数二三戸のうち六二%が高持であり、三八%は無高である。苧紬のような農村工業があり、紬・蓆などの家内生産はあるが、生産の主体となつてゐるのは、水田耕作であろう。三八%を占める無高の人たちのうちには、「大工職」・「鋳懸師」・「桶師職」などの手工業者、「古かね商売」・「米吽商売」・「苧紬商売」などの小商人があつ

たとしても、そのほとんどは高持との間に請作関係を結んでいたと考えられる。近世後半期を通じて進行した農民層分化の一極としての「日雇賃取」は、ここではまだ大きな比重をもっていない。明治三年、良川村の職業調査は、次のように分化の様相を示している。

「惣竈数 一九二軒

内高持 一五七〇

頭振 三五〇

内請作 一一六〇

工職 二一〇

諸商 三〇〇

日稼 一六〇

奴隷 八〇

前掲史料との総戸数における異同は問わないとして、全戸数の六〇％が請作人であり、「日稼」を生計のより所とする戸数が八％である。加賀と能登を結ぶ交通の幹線に沿う農村だけに、分化・分解はいちじるしく進んでいるようにみえる。こうした農民層の分化、ことに請作関係の発展が、近世中期以降領内各地にみられる子作層の抵抗の基盤となるのであるが、これまでこころみてきたような保有高ないし請作高を示す数字による把握だけでは、分化のほんとうの深さを測ることはできない。領主と親作・子作を含めた農民層との階級関係がどのようなものであったか、親作・子作の間にどのような階級関係があつたかが、具体的に明かにされる必要がある。そのためにこの村の幕末期における小作慣行をとりあげることとする。

良川村の小作慣行を知るべき直接の史料はないが、天保十一年（一八四〇）以降、能登口郡においては次のような

小作慣行がつづいていたようであり、それは良川村においても同様であつたと思われる。⁹⁾まず高持百姓の持高に応じて村の耕地を再分割する田地割は、藩の規制通り二〇年目毎に行われ、さらに村の水田を作高に應じて再分配する「閭替」は、四年乃至七年目毎に行うことになつてゐた。もともと石高制・一村平均免制を採用し、一村を貢租收納単位とした、加賀藩の慶安・明暦年間の改作仕法は、上から共同体的諸閭係を創設し、同時に共同体成員としての封建的自営農民を創出することを意図したものであり、寛文一〇年（一六七〇）の地割制度の強制は、こうした共同体的諸閭係を完成し、封建的自営農民の分解を阻止しようとする意図のもとに行われたものである。したがつて、その後農民層の分化がすすみ、高持百姓が子作人に転落した場合にでも、彼らが貢租を負担する封建的自営農民であり、直接生産者である限り、領主権力はこれを地主層の無制限の収奪から守らなければならなかつた。諸作閭係が一般化するに及んで、寛政九年（一七九七）、これまでの地割制度のほかに、さらに作高に應じて水田を再分配する閭替えの実施を命じるにいたつたことは、領主権力が農民層の分化の進行に対応して、作人を成員とする新しい共同体的諸閭係を、上から作り上げたことを意味しているのであろう。そこでは、手作地主も子作人も、直接生産者としては、村の水田に関する限り、耕作権的持分権がみとめられていた。このことは、村内に不可抗力による部分的不作があり、それが規準収量である「米目」の六〇%以下であつた場合には、作人はすべて「右歩に届候様一村惣作高より余内」をうけることができるという慣行の中に明かに示されている。子作人が直接耕作せず、「又卸」することが厳禁されているのは、こうした共同体秩序が乱されることを恐れたからにはかならない。もちろん右のような対応は諸作閭係の一般化を前提としてゐるのであるから、子作に対する親作の地位は一応みとめられている。たとえば高持百姓は、「手作の外、卸高に当る分、子作え勝手次第卸」すことができ、子作の收納米と作徳米の收納が遅れた時には「御收納は不及申作徳米も御收納同様御詮義可被仰付」きこととなつてゐる。けれども、新しい共同体的諸閭係の中にあつては、親作の利益はいちじるしく制約される。従来小作にだして来た高を「猥りに引揚子作の手を為明候義難相成」

というのが原則であり、高持の家族が成長して耕作をはじめるといふ時にだけ、それも全子作人から平均に引揚げるという条件付きで許されていた。また子作人が「惰農」である場合には、「村役人え申達、遂衆議引揚余人御候義不指支」とされているが、これは親作の保護というよりも、領主の利益を守るためであつたにちがいない。租米と親作作徳米を合せた「合盛」については、ことにきびしい規制が設けられていた。この合盛は、閏替えの度に、各々の土地について、「地味の善惡引上げ引下の詮義、惣百姓並五ヶ村役人等立会得と吟味の上取極」めることとなつており、「親作の私を以御揚仕候義」は堅く禁止されていた。「合盛」決定の規準は、寛政九年（一七九七）以来、「拾ヶ年の間、親作より小作え用捨米に御賃米夫食御賃米と引合不足に相成候分引捨、拾ヶ年の間土地より取揚候米に御賃米夫食御賃米を引足致平均、它石高に何程宛と米目相定」め、これを各土地に配分したものである。さらに夫食御賃米・作損御賃米などがある時には、作高に應じて分配され、作損御賃米のある場合は、その割合にしたがつて、親作は作徳米を減免しなければならなかつた。寛政九年（一七九七）に定められた、子作に対する親作の「用捨引下け米」は、その後もひきつづいて継続されることになつてゐる。このようにして親作の利益は制約され、一方子作は耕作權的持分權をみとめられていたのであるから、この村の親作は、いわば單なる作徳米取得者としての地位におしとどめられていたといふことができるであらう。

地券が交付され、土地所有權者が法的確證をうけた、明治六年当時の良川村の小作慣行はこうした段階にあつた。子作人の耕作權的持分權が親作に奪われるか、子作人がこの既得權を守り通すか、あるいは子作人がこの既得權を基礎に地主になり上るかという課題がここには残されていたのである。

(1) 以下島屋村の二つの斗争事例に関する史料は、「島屋町史」編纂のため、金沢大学若林助教授が中心となつて集められたものを、利用させていただいた。註をつけない限りはすべて右の史料によつたものである。

(2) 「鳥屋町史」一九六頁

(3) 同右、五二八頁

(4) 幕末期能登口郡の小作慣行に関する記述は、金沢市立図書館所蔵「高請卸方仕法一件」によつた。

(5) 「越中史料」(巻四、五七頁)によれば、明治五年新川県は大蔵省へ次のような資料を提出している。

「小作取上米の事

草高

一畝石 免四つ 中段の村方

此取上米平年

壹石壹斗程 壹坪に付平均四合五勺八才八

内六斗五升程 高持より小作え卸付米

此内四斗四升五合参勺六才 定納口米夫錢買納高

壹斗程 肝煎給米圓穀並諸打錢等掛り物凡代米圓

残壹斗三合程 高持作徳米

四斗五升程 小作作徳尤此内を以て屎物等相弁候

一 貢米納方は、親作持に候得共、小作に為納候節は、親作より納め所遠近により、参升より壹升五合程迄、余荷米相渡候
右凡当如斯御座候、尤村々により不同有之候事

この資料にあらわれた、領主、地主、小作人の分配率關係を、平野「日本資本主義の機構」(二八頁)の分配率に比較すれば左のようである。

領主

地主

小作人

平野「機構」の%

三七(三)

三六(三)

三三(四)

「越中史料」の巻

第九六

九四

四〇九

領主取分の地主取分に対する圧倒的比重、小作人取分の相対的な比重の大きさ、これらは加賀藩領における地主的土地所有の発展段階を示すものであろう。

B 小作騷擾

領主権力によつて創設され、ついで再編成された共同体的諸関係、その中での農民層分解の阻止、地主的土地所有の未成熟。加賀藩の場合、近世中期以後、親作に対する子作人の抵抗が、農民一揆の底流としてあらわれたとしても、それはこうした諸条件の上においてであつた。そこからは、幕藩体制をくつがえし、明治維新をなしとげるための原動力は生れて来ない。むしろ明治政權の地租改正を中心とする、農奴解放を目ざした諸政策は、農民層にとつては外からの衝撃であり、これまでの村内部の諸関係は大きな混乱におちいらざるをえなかつた。明治一〇年の礪波郡騷擾も、良川の騷擾も、それらはいずれもこの混乱・動揺を通じて、新しい均衡が生まれる過程においてひき起されたものである。

明治六年八月、新地券交付が決定されてから約一年の後、良川村の諸作人長滝太左衛門ら九五人は、石川県令内田政風に次のような嘆願書を提出した。

「 御地盤高の儀に付奉嘆願事

能登国第三区鹿島郡良川村

願人 長滝太左衛門

等

同村

相手 小左衛門

等

右願人長滝太左衛門等九拾五人奉申上候私共村方御地盤高千百石余の内三百貳拾石寛政度の頃右小左衛門等より買請所持罷在年々御收納並村方諸割符仕米候処今般地券狀御下渡に付右買請候御地盤不殘同人等え可相返旨申出候得共愚昧の私共会得仕兼元米小前の私共代錢指出御地盤永代買請往古より家録と相心得罷在候処代錢も不相返御一新を申立無謂可致只取義は不当の族と奉存候に付春以来色々と恭順に及永請に候得共當時の御趣意何程大金を以買請候共只可相返義と幾重頼入候ても一切買入不申斯相成候ては難渋の私共是迄數年作米候御地盤仕只取候ては指當り當世方無御座家内養育方に指迫り一統相嘆心痛罷在候間不得止事御難題の御義に奉恐入候得共從前より數代御收納等無滞仕米候御憐愍を以地券狀私共え御下渡の義奉嘆願候其儀御規則に相違仕候はは親作え御下渡に相成候共是迄の通毎歲不相替私共え為作小作の義に村方え御説諭被成下候様出格の御慈悲を以願の通御間届偏奉願上候粗承候得共近村能登部下村にも村方同様の趣先達て奉嘆願候処夫々御採用に相成候由に御座候最早自力に承諾の手段も無御座候に付何卒御仁恵の御詮義被為成下候様奉願上候一統連印可仕答の処前頭の通教拾人に付太左衛門等四人引請此段乍恐書付を以伏て奉嘆願候以上

この村では、村の土地の持分権をあらわす石高が売買譲渡されるのと同様に、請作人の耕作権の持分権をあらわす「地盤高」ないしは「作株」が売買譲渡されていたのであるが、明治政權による地券交付を契機に、親作側が「地盤高」を無償廃棄して、完全な土地所有權者に成り上ろうと攻勢にでて来たのに対し、請作人側が三二〇石の「地盤高」を守るたかに固結して立ち上つたわけである。請作人たちは単に「地盤高」を守るだけではなく、地券を自分たちに交付せよという要求まで示しており、そこには消極的ではあるが、親作側と対立して、同じく土地所有權者になり上ろうとする意欲をみる事ができる。礪波郡騷擾の場合は良川の場合とくらべて、請作人側がいちじるしく積極的であるが、事態の性格に相異はないと考えられる。礪波郡の場合は、請作人側が地租改正の「民に逸勞の偏なきの御主意」を盾にとり、「地価帳に小作人の記名調印し以て永世受地たるを証し、地主の威權を以て受地を与奪する

を得ざらしめ」、藩政期以来の既得権を強化し、確立することを要求し、親作側に対して積極的に攻勢にでている。この斗争の過程で、請作側の偽文に「請作人との称名を廃して向後地主と決定候事」、「親作との称名を廃して向後地代佃持主と決定候事」という条項があらわれるが、これは決して不自然なことではなかつたのである。広汎に共同体的諸関係を維持・存続せしめてきた旧加賀藩領においては、村の土地に対する親作の持分権と請作人の耕作権の持分権との比重は、地域によつては、ほとんど相均衡していたのではないかと考えられる。

しかし良川村においては、親作は小川権三郎を惣代として、請作側の嘆願書に答え、まず次のように主張する。「是迄田形請尻の地所を讓替致候御作り株と相唱ひ小作同土相對にて売買仕来」つた事實はみとめるが、今後は「小作の者請尻の売買無き様」、そして地券は親作に交付されるようお願いしたい。ただいわれなく作高を「小作より引上手を為明候様の義は一切」しないというのである。

県当局は請作人側に対して、「作株親作より買請候書跡有之候はば不殘可指出」と立証を求めたが、作株讓替えを記録した「出作株帳」はあつても、親作から讓渡をうけた記録のあらうはずはない。かくて当局は両者に対し、「地所は元より親作小林小左衛門等持地」であり、請作人は「相對を以從來通子作可罷在」と申付けた。長滝太左衛門ら五九人の請作人はこの決定に服したが、残り三五人は「會得仕兼」として、ついに紛争は騒擾化するにいたる。すなわち明治七年二月、その頃同じ問題で紛争中の能登部下村の請作人惣代谷与八は、三五人の請作人を指導して、「諸商売の店先え大勢罷越今般願筋に付同服難成義に候は何れにも品物百余人の者共より買受候義不相成候嚴敷儀定仕」つて、商品のボイコットを決定したり、そのほか「三十余人の者谷与八に随心仕段々指揮を請林五良三郎等始乱に不都合の儀昼夜相仿く」にいたつてゐるのである。

親作側はこの騒擾の鎮定を県当局に願ひ出るとともに、あらためて山崎勘平らを惣代として、「私共村方の義田地請御の儀在来人別卸にて惣卸と申義も無之人々持地判然境界相極居親作誰より小作誰え卸付来候義にて作株杯と申義

は一切無之」と「作株」の存在を否認し、さらに能登第三区々長真館与四郎は、区内全体にわたる問題として、「從來作株の名称有之向明治五年の出作高を以株高取極已後売買御指留出作手余り候節は無代価にて地主え返地致候様」決定してもらいたいと当局に申出ている。しかし当局としては、「出作株帳」一つをみても、從來の小作慣行を否認し去るわけにはいかない。その結果、七年三月、親作・請作の両者に対して、「爾後永小作に取究め、猶約定書為取替候様」決定を下し、申し渡した。約定書にとりきめられた永小作の内容は左の通りである。

「 第一条

一、今般永小作に取極候に付地所從來の作高に応地所取極永卸請可致候依て向後地主の自由を以て地所引取候様の義無之若家内人多に相成地主手作地不足判然たる節は其小作え卸し地に応し割合を以永卸地の内引取可申尤地主に於て余分の地所引取余人え卸付候義は一切致す間敷且一旦引取候地所にてても余分に相成候節は最前の割合を以永小作え卸付可申候事

第二条

一、地主の内子弟別家致し耕地配分候節は右配分の耕地半分は本家より相渡残半分は永卸地の内割合を以引取可申事

第三条

一、卸地小作に於て又卸一切致す間敷事

第四条

一、合盛米不足或は遅滞に及び候節は速に地所引取外小作え卸付候義地主勝手たるへく事

第五条

一、地主に於て地所売払候節は永小作付にて売払可申買主に於て手作地不足の節は第一条の通可為事

第六條

一、合盛米取立方は總て本約証書の通たるへく事

第七條

一、宅地の義地主売払候節は永受人相當の代価を以買取候はは必ず永受人え売渡可申若し永受人買取難く余人え売払候節は小作付の儘売払可申事

第八條

一、已後地主を以親と尊し小作を以子と憐み相互に信義を不失実意を以万事の注意を可致事

藩政期の小作慣行の一部は永小作權としてまとめられている。おそらく諸作人側が、地券交付にあたって強調し、主張してきた「作株」売買の慣行も黙認されたのであろう。しかし村の土地は分割され、所有權は親作にあたえられた。土地の耕作權の持分權者であつた諸作人は、個々の地主の私有地の永小作人となり下つた。領主への租米がその大部分を占めていた合盛米は、すべて地主の手に收められることとなり、領主の地代徴收權はそのまま地主の地代徴收權にうつされた。そして「已後は地主を親と尊び、小作を子と憐み、相互に信義を失わず」という封建的隸屬關係が、地主・小作間に設定され、さらに今後は「万一諸御方に付願の筋有之節は一人別に願立余人の申口引請惣代杯と申立候義決て不相成」と小作人の組織的斗争の道が封ぜられたのである。

地券交付を契機として、諸作人のこれまでの地位は、親作側の攻勢と、これをバックアップした新政權の圧力のもとにわかにおちた。ここに諸作人たちの自暴自棄的な動きがあらわれる。三月一日と同一三日の二日にわたり、諸作人林五郎三郎・守田与三郎らは「大勢の小作え不筋の所業申含……樽酒持參大岡千右衛門永村永右衛門沢弥三右衛門の耕地を乱に田荒仕無謂次第に付見るに不忍体裁」と地主側がいうような事態が起る。しかしこうした事態を起したのは、すでに分裂し、孤立した小數派の小作人であつたから、忽ちして鎮圧されている。三月一八日には、林五郎

三郎ら小作人惣代は大岡千右衛門らに對し、「私共棟取にて子作の内三十名斗同服貴殿方耕地樽酒持参乱に打起し候儀は全く心得違に御座候」と詫び状を入れ、いとも簡単に敗れ去つた。良川村では、これまで領主支配下におかれてきた共同体的諸關係が、こうして新しい地主支配下の共同体的諸關係として再編成されていくのである。

(1) 土屋・小野「明治初年農民騒擾録」二三八頁。なお明治三二年の一番の争議の際、「証人訊問調書」の中で、地主のことを「地価持」と呼んでいる。たとえば、

「問、株を売れば其卸付料は誰に納めるか。答、夫れは地価持に納めます。」

「地価持」という言葉が、広く用いつづけられていたことを知ることができる。

(2) 加賀藩で諸作關係が一般化していつた当初においては、それは親作・子作間の「相對卸」であつた。しかしこれは在來の共同體秩序を破壊にみちびく。寛政九年（一七九七）、藩は口郡に對し、「閭替」の定期的な実施を命じるとともに、「相對卸」を禁じ、「惣卸」を命じた。この諸作關係では、個々の親作は村の總卸高の一部をもち、個々の子作は總卸高の一部を請作する。租米と地主作惣とは合わせて「合盛」として、子作から村役人に納付され、地主は村役人から卸高に應じて作總米をうける。こうして諸作關係は完全に共同體的規制の下におかれるわけである。この「惣卸」の慣行は、口郡だけでなく、越中地方などでも広く行われたようである。口郡では、この慣行がくずれた結果、天保九年（一八三八）、ふたたび「相對卸」が命ぜられたが、その後もながく残存をつづけたように思われる。良川村で、この頃までそれが行われていたか否かは、いまのところ判然しない。

(3) 前掲「高請卸方仕法一件」によれば、天保十一年（一八四〇）当時の慣行においては、年貢米延滞納を条件とする小作人の土地取揚は、「年々御收納明等不埒の百姓」と特に「惰農の者当年耕作無精に仕……御收納相滞候」場合とに限られており、この二つの場合にでも、裁許に申出たうえ、その指図をまたなければならなかつた。右の「第四条」においては、延滞納があれば理由の如何を問わず「早速」取り揚げられることになっている。この一つをみても小作人の地位がいかに引下げられたか

を知ることができるであろう。ここでは本源的蓄積の過程が、こうして準備されるのである。

三 明治中期の一青小作争議

地租改正をめぐつて、この地方の農村では、多かれ少なかれ良川村に起つたような、波乱がまき起され、その結果は地主支配下の共同体的諸関係への再編成がもたらされたと考えられるが、こうした新しい関係の中で、地主層はさらに攻勢にでてくる。まだ小作人側に残されている永小作権の廃絶をねらつての攻勢である。一度敗れた小作人たちは、ふたたび立ち上つて、これを守らねばならない。明治二―三〇年代を通じての、一青の小作人たちの長期にわたる斗争は、このためのたたかいであつた。

A 一青村と永小作権

一青村は良川村と同じく現在島屋町の一字となつている、良川の東北に隣接する農村である。幕末期の史料は一青村の概況を次のように記録している。¹⁾

「一青村 鹿島郡 片山里

一千百五拾石

定免 三つ八歩 金沢え道程拾四里拾町程

一百姓家数 百軒

一頭振家数 貳拾軒

惣人数 六百三人

内 三百拾六人 男

貳百八拾七人 女

外 宅軒 藤内

: : : :

一耕作馬 拾貳疋 牝馬

一押立候稼無御座 芋鉋 日雇賃取

: : : :

一 一青村産物 専業

└

この村でも家内工業としての芋鉋と「日雇賃取」とが、農業を補充する役割を荷っているが、特に産物として「専業」があげられているのは、所口近在の農村である関係から、蔬菜類が商品化していたことを示すものであろう。しかしこの史料を通じて、当時の農民層分化の様相をうかがうことは困難である。その後明治二五年当時のこの村の作株の総計は四〇〇石で、少くとも耕地の約三五%が永小作地であつた。永小作権をめぐる斗争に参加した小作人の数は、明治三〇年代に入つて、約三四名、地主は約一八名、地主の土地所有は、七町以上一名、四町以上三名、三町以上一名、二町以上七名、二町以下六名という内訳であつた。一青の農民層分化に関する史料としては、これ以上のものを見出すことができない。そこで、この村の地主と小作人によつて争われた永小作権の問題にうつらう。

良川の騒擾のころ、石川県当局は能登第三区長に命じ、「地所受卸致候者共約定書為取替可申義」を区内村々に説諭させたが、騒擾の一段落とともに、一青においても地主・小作人間に小作証書が一斉に取りかわされた。小作人から地主に差入れた証書の一例を示せば左のようである。

「 証

一田壹反七畝拾九歩三分 字豊田

合五反五畝六歩壹分

此御付米

六石三斗三升貳合 但壹分に付三合八勺二才三

但し五歩米納十一月中残五歩米金の内石代御取立の節前以御申越次第可相納候

右は貴殿一青村御持地の内相当の代金を以て小作株譲諸々作仕候処実正也然上は米金書面の通年々無遅滞可相納若相滞候節は家財売払猶請人より相弁地所御引上の義御勝手次第可被成候且自然手前不如意に相成候節は御案内の上相当の代金を以て作株譲替可仕候依て為後証一札如件

明治七年十二月

請 作 青井与十郎

中村忠平殿

請人同村 青井与作

ここでも共同体的土地所有としての性格をもつ石高制は廃止され、地主の土地は確定したものとなつてゐる。小作料延滞納があるとき直ちに土地取揚げという悪条件も、良川村の場合と変りはない。一方永小作権は「作株」として売買譲渡しうることが定められ、小作料の形態は半分米納、残り半分代金納である。しかし、小作料は証書面の「卸付料」がそのまま支払われるわけではなく、次の事例のような計算方法にしたがうのが一般であつた。

「 与助

大宮田

一七斗三升五合

内 三升三合 定引米

残り 七斗貳合

内 壹升四合 引

残り 六斗八升八合

内 三斗四升四合 米納

三斗四升四合 金納

代苞四二十五錢二厘 一

証書面の卸付米から「定引米」と「減米」とを差引いた残りが実納小作料であり、その半額が玄米で納付され、あとの半額が「石代金納相場」石当り三円六十四錢換算で金納されるわけである。ここでは、藩政期の「定引米」のよくなものが依然として守られている点にも、注目しなければならないが、さらに重要なのは、この半額金納制が地租改正後にあらわれてきていることであろう。旧米合盛米の中には、租米額が大きな部分を占めていた。その租米部分が、地租改正によつて金納化されたので、半額金納制がはじまつたのである。これは一青だけのことでなく、隣村羽坂でも、「斗代のうち地租分だけを金納とされたところから、『作り株』は『地租落し』と名付けられた。」という。藩政期の請作人は貢租の負担者であつた。地租改正後になつても小作人は、實際上の地租の負担者である。地租が金納化された以上、小作料のうち地租部分は金納化すべきである。半額金納制はこの論理にしたがつてうまれてきたのであろう。しかし、その後にはいたつて、地租が据置かれる一方、米価騰貴の傾向がはつきりあらわれて来ると問題は深刻なものになる。金納部分を地租部分とみる小作人側は、あくまで当初の換算率石当り三円六十四錢を守りつづけようとするが、地主側は証書面に示された小作料米納の原則を盾にたたかいをいどむのである。

この村では、地租改正後明治一五年までは、圖替の慣行がひきつづいて行われているが、その後廃止され、一七年一月にいたつて、一青村地区地所持主の連名で惣小作中であて左のような「義定書」を差し入れている。

「 田地卸付の義定書

一卸付米の内五歩米納十一月中残五歩米石代金納の節前以申入れ候間可相納事

一卸田子作より小作え譲り替可致事

右拙者共一青村持地の内代価時価相場を以譲替株立卸付候処実正也然上は七ヶ年限り証書相改候事に卸付米書面の通り年々無遅滞可被相納候若相滞候節は地所引揚猶其許共持地並家財為売払可申為後証一札如件

この「義定書」差し入れの事情はわからないが、おそらく小作人側全体の何らかの圧力の下で、地主側が地租改正後小作人に残された永小作権の確認を迫られた結果であつたと考えられる。七ヶ年毎にこうした「義定書」を書き改めるということは、永小作権を永久に存続させることを意味しており、地主側の自発的意志にもとづくものとは考えられないからである。藩政期の請作人をもつていた耕作権の持分権に比較すれば、「義定書」の永小作権は、地主との関係においては、いちじるしく弱められている。しかし、地主側にとつては、この永小作権は、半額金納制一つをとり上げてみても、我慢のならない障礙であつた。

(1) 「烏屋町史」一九六頁

(2) 同右、二七八頁

B 小作争議

一青の小作争議は、地主側の攻勢からはじまつており、その端緒は、はやく明治一〇年頃、村内の宅地卸付料引上げの強行にみることが出来る。当時の戸長高木久次郎は、後日「証人訊問調査」の中で、その事情を次のようにのべている。

「問 明治八年頃字一青に於て、宅地卸付の事に付親作小作を其方宅に寄せ協議を為したる事ありや。

答 明治八年ではありませぬが、……明治九年より一〇年の間に於て上げました。

問 旧歩三合を四合にせしや。

答 塚本久四郎の宅に於て親作が寄合ひ、旧歩一步に付一合宛上げると云ふ協議がござりましたが、塚本久四郎は単に小作の承諾なくして親作のみが上げる事に協議する訳に行かぬと云ひしにより、其当時私は戸長の廉にて岡田太右衛門は卸付人惣代として塚本久四郎の三人にて小作人を一人宛呼出し其上引上げの事を説諭せしも、初めは容易に承諾せず依て段々と説諭の末、今度は地価等も随分上りし故以後はかくの如き事を云わぬ故今度限りは上げて呉れと頼みました処漸くに承知して呉れました。

永小作権そのものには触れていないし、耕地の小作料もまだ問題にはしていないが、こうしたところから地主側の攻撃は開始される。彼らは小作人を一人ずつ呼出し「説諭」して、歩当り三合の宅地料を四合に引上げること、成功しているのである。その後一七年、地主側にとつては決定的に不利益な永小作「義定書」が作成されるが、二〇年代に入つて、地主側発展期に入ると、地主側の焦燥は次第に高まつてくる。「義定書」書替え期である二四年になつても、彼らは小作人側の書きかえ要求に応じようとしないうで、むしろ作株を廃絶しようと決意する。小作人側もこれに対抗して問題を法廷にもちだすにいたる。すなわち明治二四年、一青の小作人北林吉太郎ら四一名は、土師唯房を代言人として、地主高木義平ら二四名を相手どり、「義定書」書替え請求の訴えを、金沢地方裁七尾支部に提起した。この小作人側の請求に対し、地主側は、「義定書」に「証書相改」めとあるのは小作契約を改める意味で、「義定書」は永小作契約でない主張し、あるいは「元米小作米は米納を正当なりとす」と主張した。ところが地主側のうち高名忠衛門ら六名は、反対派を結成して小作人側の要求を支持し、地主側は分裂する。反対派はこの紛争を「該証の年限満期を幸ひ古米の習慣を無効になさんと謀る者ありたるより争を生じたる」ものとし、裁判所もまた小作側の主張をみとめて、二四年一二月地主側は敗訴と決定、「義定書」は書きかえられた。しかし、その後地主側の永小作権廢

絶の決意はますます強固となる。三一年にふたたび書替え期となつたが、地主側はこの年の民法施行を契機に決定的な攻撃を加えようと決意し、小作人側の書替え要求に応じようとしなない。三二年三月、一青の小作人辻口栄八ら三四名は、弁護士土師唯房を訴訟代理人として、地主高木義平ら一八名を相手どり、「義定書」書替え請求の訴えを金沢地方裁七尾支部にふたたび提起した。地主側も横田好維を弁護に立てて、これに応じ、「義定書」は七年毎に鬩替をする契約であると主張し、あるいは七年毎の永小作証書書替えは民法に違反した違法の契約であると主張した。しかしこの時も、地主青井伊左衛門ら七名の反対派は、今井謙三を弁護士として、小作人側に同調している。三二年一月にいたつて、裁判所は前の場合と同様に、小作人側の主張する永小作権を認め、「義定書」の書替えをなすべき判決を下した。だが地主側は、同年二月大阪控訴院にこれを持ちこみ、依然として書替え要求に応じようとしなない。翌三三年二月、控訴棄却となつたが、同年五月、さらに大審院に上告し、三四年一二月、大審院において敗れ去るまで、彼らは執拗きわまる法廷斗争をつづけるのである。地主側は小作人側を法廷斗争に引きこみ、持久戦をつづけ、財力にものをいわせて勝ちぬこうと意図したのであらう。

この「義定書」書替えをめぐる法廷斗争と併行して、地主側は宅地及び耕地の卸付料増加請求の訴訟を提起している。この訴訟は個々の地主・小作人間の訴訟の形態をとっているが、その一つ一つが地主側の小作人側全体に対する攻撃であつた。だからこれに対する小作人側の抗争もまた執拗であつたらしい。これらの訴訟のうち、地主上田六三郎の耕地卸付料増加請求事件の結果は重要な意味をもっている。この事件の被告、小作人細川吉太郎は、明治三三年一月第一審の判決を不当として、金沢地方裁判所に控訴したが、控訴の結果は小作人側にとつて大きな打撃であつた。左に「判決理由」の一部を摘記しよう。

「被控訴人は地所価格の騰貴及び地所負担の公課の増加を以て本訴請求の理由となすと雖も民法施行以前に於ても施行以後と同じく此等の事由あるときは小作料を引上げ得べしとする法律上の規定なきのみならず、此の如き慣習

ありとの事実及び当事者間に此の如きことを予見したりとの事実を見るべきものを以て右小作料引上げの請求は理由なきものとす。然れとも本件小作料は米納を以て本位とし其金納に関する従来の換算方法は米一石に付金若干と定めあることは当事者間に争なき事実にして、此事実自体に依り金納に関する分は小作米支払當時の前後に於ける米価の平均相場を標準として支払額を定むることは当事者間に予見したるものと認むるに足り又一石代金七円四十六銭五厘を平均相場と認むるに由り此点に関する被控訴人の請求は相当とす。」

判決は、小作料引上げはみとめないが、半額金納部分は、米納が原則になつてゐるのだから、時価に換算して支払うべきであると決定したのである。地主側は、二四年の訴訟の際には、米価の急速な昂騰に直面して、全小作料の米納化を要求したが、敗れている。今度は金納部分の換算率を、石当り三円六四銭から當時の時価七円四十六銭五厘に引上げることを要求して、これをかちとつた。半額金納部分が地租相当部分であることは、一般の通念であつたにもかかわらず、裁判所は地主側の主張にしたがい、小作契約書や「義定書」の形式的な米納の原則を根拠として、右のような判決を下した。この訴訟の結果、形式上の小作料はすえ置かれたが、事実上の小作料は大幅な引上げとなり、小作人側の敗北となつたわけである。こうした紛争は、同じころ隣接部落の羽坂でも起つており、同様の結果となつてゐる。ここでは、明治三二年二月、地主・小作人間に、「地租落し」が民法施行後五〇年間有効に存続することを認めるとともに、金納部分換算率を三円六四銭から八円一〇銭に改めることを契約した「永小作権確認証書」をとりかわして妥約した。²⁾

一青村では、三二年から三四年にかけて以上のような、執拗な地主、小作人間の法廷斗争かくりひろげられたが、その後も紛争はつづいたらしく、三八年三月にいたつて、次のような「和解約定書」が作成され、ようやく争議は一段落をつげた。

「第一条

一卸付米は毎年十一月三十一日迄に玄米を以て半額を地主に納む残半額は其十一月三十一日の時価相場に換算し翌年五月十四日迄に納むる事

第二条

一卸付米壹石に付定引米として四升五合三勺八才を永小作者の利得とす

第三条

一宅地卸付米は改正歩壹歩に付玄米壹合を増し地主へ納むる事

第四条

一地上権永小作権は台帳を調製し売買譲渡の際は地主へ相談の上区長に於て保証する事

第五条

一地上権永小作権台帳は区長之を保管する事

半額金納制も、「定引米」も保証されており、永小作権は守られている。永小作権の売買譲渡が確認をうけている。しかしかつて一度引上げられた宅地卸付料は、さらに一步当り一合の引上げとなり、小作料金納部分は毎年一月の時価で換算となつた。長期にわたる地主側の攻撃から、自らの利益を守りつづけた小作人たちも、明治三〇年代後半期に入れば、ついに一步を退かねばならなかつたのである。そしてこの後退の最大の要因として、地主側の攻撃をさえた国家権力があつたことは、改めてのべるまでもないであろう。

だがそれにしても、小作人側がこの長期の斗争をたたかい抜くことができたのは、何を支えとしてであらうか。何よりもまず、それは小作人側の団結の共同体的な強さであつた。この斗争を通じて、地主側は細川仁左衛門方を本拠としたのに対し、小作人側は場勝長蔵方を本拠としてたたかつた。一時は「若者仲間では村八分事件がおこり、小学児童の間にも石の投げ合いがはじまるさわざで、登校時間を変えるなど学校側の考慮が必要であつたという。」³⁾そしてつ

いには、地主側から区長をだせば、小作人側からも区長をだすという政治斗争まではまづつてゐるのである。地主側が各個撃破の戦術に出て、宅地料・小作料の引上げ訴訟をはじめた時にも小作人側は、地主反対派とともに強固な組織をつくつて、この戦術に対抗した。その当時彼らの間に結ばれた「契約証」をみよう。

「 契約証

今般鹿島郡鳥屋村字一青区小作間並びに親作の一部間に於て宅地卸付料増加請求事件並びに田地小作料増加請求の訴訟親作人より提起したる場合に於て費用の支出等に付左の通り契約を締結す

一岡田太七より垣内小太郎に係る宅地卸付料増加請求の訴訟事件並びに其の地主より宅地受けの者に對し卸付料増加の請求を為したる場合に於ては被告と為りたるものは勿論一般の宅地受けの者並びに田地永小作權を有するもの親作にて小作に同意するものと連合して訴訟費用並びに実費を支出し支弁するものとす

一田地永小作權を有するものに對し親作より小作料増加の訴訟提出したる場合に於ても前同様共同訴訟は勿論假令單獨の訴訟なりとも被告となる者而已ならず一般の田地小作人並びに一般の宅地卸受のもの及び親作にて小作人に同意するもの連合して訴訟費用並びに実費を支出し弁するものとす

一前記の訴訟事件に付ては田地永小作權を有するもの並びに宅地受けのものは協同一致の運動を為し飽迄其目的を貫徹する事

一親作の中小作に同意するものは自分の利益を不顧小作人に力を添え小作人權利伸張の目的を達せしむる事に尽力するものとす因て前記の如く費用を補助し負担するなり

但し此契約は左に署名捺印するものの間に於て堅く履行するものなり

右契約を明確ならしむるため左に署名捺印し小作事務所に保管するもの也

明治三十三年三月 日

地主側の訴訟戦術に対抗し、あらゆる場合に「宅地受けの者並びに田地永小作権を有するもの親作にて小作に同意するもの」が團結して、その訴訟費用を共同負担することを契約したものであるが、その中に小作人の「權利伸張の目的」をかかげ、「協同一致の運動をなし飽迄其目的を貫徹する事」を決定している点などは注目すべきであろう。ここにはすでに恒常的な小作人の斗争組織をみることができるのである。

小作人の斗争をささえたもう一つの条件は、地主側の分裂であり、その一部の小作側への同調である。明治七年良川の騒擾は、小作人側に分裂がおこり、もろくも敗れたが、一宵の場合には、最初から地主側に反対派があらわれ、最後まで小作人に同調する態度をつらぬいている。反対派に属する出村清右衛門ら六人の地主の土地所有をみれば、二町乃至三町二人、一町乃至二町四人となつており、その多くが自作農的性格の強い小地主である。これに対し高木義平を中心とする地主層は、七町以上一人、四町乃至五町三人、三町乃至四町一人、二人乃至三町五人、他二人であり、たとへ一部自作のものがあつたとしても、反対派に比較して、地主的性格は強い。ことにこのグループの背後にあつて、「地主側の斗争のイニシアをとつたのは、近郷切つての大地主で多額納税者たる黒氏（隣接部落）の大島幸太郎であつた。彼こそは小作人から永小作権をはく奪しようとする新興地主の典型的な存在であつた。」⁽⁶⁾反対派グループは「丸高で自作し、旧来の慣習や「作り株」に好感をもつていた。」⁽⁶⁾といわれるが、彼らの古い共同体的諸關係への執着が、永小作慣行を廃絶して地主支配を一層強化しようとする地主層に対して反対派を結成させ、小作人側と同調させたのである。

小作人の團結の強固さは、共同体的な團結の強固さであつた。反対派地主も、かつての共同体的諸關係への強い執着をもつていたからこれに同調した。そして彼らが守りつづけたのは、藩政期の領主権力下の共同体的諸關係のなか

で、作人にあたえられた諸権利であつた。地主層は、明治政權下の新しい地主として、古い共同体的諸関係を廃絶し、自らの支配の下に共同体的諸関係の再編成を完成しようと必死の攻撃を加えている。こうした側面からいえば、一青の小作争議は、旧加賀藩領における社会経済的な後進性の一つのあらわれとみることができであろう。だとすれば、この争議の性格をもつて、この時期の全国的な農民斗争の性格をそのまま規定するわけにはいかないかもしれない。しかし少くとも、この争議は明治二―三〇年代の農民斗争の一形態としては、評価される必要がある。そしてまた、この時期を地主制発展期とみるならば、一青争議の地主攻勢に、対する防衛のための斗争としての一般的性格は、この時期の農民斗争一般にも見出しうるのではなからうか。

(1) 小作料物納の原則が、わが国地主制にとつて、いかに重要な意味をもつたかは、この一つの事例をみても明かである。なおここでの半額金納制は、いわば部分的な「コムニテイション」であり、それが地主制の圧力の下に正常な発展を阻止され、封建的地代としての代金納制に逆行させられているのである。

(2) 「鳥屋町史」二七八頁

(3)・(4)・(5)・(6)同右、二八四頁―二八五頁

附記 本稿の起草にあたり、金沢大学若林助教教授および大阪市立大学原田伴彦氏から貴重な示唆をあたえられた。附記して謝意を表したい。